

心の中に 島が見えるか

今年の大半、ぼくはポリネシアの島々を渡り歩いていた。現在、太平洋の島嶼部とうりゅうぶに暮らしているのは、四千年ほど前に東南アジアのあたりから、東の海へと漕ぎ出した人々の子孫である。彼らは生粋の航海者であり、海洋民だった。

海図もコンパスもなかった時代、島影の見えない水平線へ向かって旅に出た最初の人々の勇氣に、ぼくは心を揺さぶられずにはいられない。その先に島があるかどうかともわからなかったのに、今いる島を飛び出して、まだ見ぬフロンティアを目指して旅立った人々が確かにいた。その勇氣はいったいどこからくるのだろうか？

もちろん渡海の理由はいくつもある。台風による被害で島を出て行かざるを得なかった島民もいただろうし、漂流や遭難によって見知らぬ島に偶然たどり着いた漁師もいただろう。が、それと同時に島の岸辺に立って好奇心から沖へ漕ぎ出した人々もいたのだ。そうした冒険者たちの軌跡と奇跡が現在のポリネシアを生み

出したといえる。

この頃の航海に不可欠だったのが、近代計器を用いない伝統航海術だった。これは、多様な自然情報を生きた知恵に置き換えていく身体技法の一つであり、遠い宇宙を自らの身体に取り込む洗練された技でもある。しかし、このような航海術は、西洋人が島にやってきて以降、急激に失われていく。

ポリネシアで完全に消滅したと思われた航海術を今も受け継ぎ、実践していたのが、ミクロネシアに住むマウ・ピアイルグという名の老航海者だった。ぼくは十年前に彼と出会い、航海術の基本を教わっている。そのとき、広大な海を旅する際に最も大切なこととして彼が教えてくれたのが、見えない島をビジョンとして脳裏に描くこと、すなわち「心の中に島が見えるか」ということだった。

銅のような大海に身一つで漕ぎ出すためには、常に目的地の島を心に描いておかねばならない。そうすれば、アクシデントに見舞われても、嵐に遭遇しても、船を目的地に導くことができる、と。

これは自分の人生にもあてはまる。迷ったとき、ぼくはいつもマウのことを思い出す。その彼も、今夏、老衰のために亡くなった。その一報を受けてはじめて気づいたのだ。ぼくにとつての「島」とは、まだ二十代になったばかりの頃に出会ったマウ・ピアイルグその人だったのだ、と。



1977年東京都生まれ。写真家。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。2000年、Pole to Pole プロジェクトに参加して北極から南極を人力踏破。01年当時の世界最年少世界七大陸最高峰登頂達成。04年熱気球で太平洋横断に挑戦し、そのルポルタージュ『最後の冒険家』（集英社）で関高健ノンフィクション賞を受賞。写真集『NEW DIMENSION』（赤々舎）、『POLAR』（リトルモア）により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞。最新写真集に『CORONA』（青土社）がある。